

福祉の街になるまでのドヤ街

—高度経済成長を支えた日雇労働者のまち<山谷>の変容の歴史—

早稲田大学 文化構想学部 文化構想学科 社会構築論系 地域・都市論プログラム
地域・都市論ゼミ2 (コミュニティ論)

松崎 拓人 (学籍番号: 1T170827-4)

【目次】

第1章：はじめに

1-1	基本的な問題意識	1
1-2	何を、どこまで明らかにしたいか	1
1-3	研究方法・論文構成	2

第2章：研究地域の概要及び歴史、現況

2-1	研究地域の概要	4
2-1-1	ドヤ（簡易宿泊所）と宿泊者について	6
2-2	歴史	9
2-2-1	江戸末期～昭和（戦前）	9
2-2-2	終戦からの復興	10
2-2-3	山谷暴動と「センター」の設立	11
2-2-4	「センター」開設当初の山谷の雰囲気と明らかになった問題	12
2-2-5	活発化する労働運動と不況	13
2-2-6	労働者と図書館のかかわり	14
2-2-7	バブル景気の到来と崩壊による山谷の変化	15
2-2-8	簡易年表	16
2-3	現況	16
2-3-1	宿泊者について	17
2-3-2	仕事について	17
2-3-3	生活や健康面について	19
2-3-4	コロナ禍において	21

第3章：「福祉の街」への転換期におけるサービス・活動

3-1	NPO 法人 山谷マックデイケアセンター ワン・ステップ	22
3-2	NPO 法人 山友会	22
3-3	NPO 法人 自立支援センターふるさとの会	23
3-4	NPO 法人 友愛会	24
3-5	NPO 法人 訪問看護ステーションコスモス	24
3-6	ほしのいえ	25
3-7	山谷夜回りの会	25

第4章：各サービス・活動による影響と変化

4-1	アルコール依存の治療	26
4-2	宿泊・生活支援	26
4-3	訪問看護・介護	27
4-4	炊き出し、食事提供	27
4-5	就労支援	28

第5章：総括

5-1	総括と図式化	29
5-2	謝辞	32

参考文献

第1章：はじめに

1-1 基本的な問題意識

本稿の研究目的はドヤ街で起こっている変容のメカニズムを解明し、ドヤ街がどのように変容しているかを明らかにすることである。

日本には「ドヤ街」と呼ばれる地域がいくつか存在する。ドヤ街とは日雇労働者が多く住む街のことであり、戦後の高度経済成長期、日雇の仕事を斡旋する寄せ場に日雇労働者が多く集まり、彼らが寝泊りする簡易宿泊所が寄せ場の周辺に多く開設されることで形成された。特に東京都台東区の日暮区、神奈川県横浜市中区の寿町、大阪府大阪市西成区のあいりん地区が有名であり、併せて日本三大ドヤ街（寄せ場）と呼ばれている。山谷の周辺には浅草という一大観光都市が存在するが、山谷とは全く雰囲気の違い、まるで別世界の地域である。以前、路上生活者であふれていた時期があり、「ホームレスが多く治安が悪い、近寄り難い危険な街」というレッテルを貼られていたのであるが、近年、労働者の高齢化に伴ってドヤ街は減少し、労働者の街から福祉の街へと転換しつつある。

そこで、これまで山谷の住人がどのように生活し、街を変化させていったのか、そして近年の様々な取り組みによってドヤ街がどのように変容しようとしているのか、という点に注目し本稿では、ドヤ街で起こっている変容メカニズムを解明し、ドヤ街がどのように変容しているかを明らかにしていく。

1-2 何を、どこまで明らかにしたいか

まず、本稿において主軸となるのは

- ・これまで住人がどのように生活し、その生活の形を変化させていったのか
 - ・数多くあるサービスや活動がドヤ街にどのような変化をもたらしているのか
- の二つである。

先述した通り、ドヤ街とは日雇労働者が多く住む街のことであり、戦後の高度経済成長期に、日雇の仕事を斡旋する寄せ場に日雇労働者が多く集まり、彼らが寝泊りする簡易宿泊所が寄せ場の周辺に多く開設されることで形成された街である。しかし、90年代半ばに日雇労働者の生活は一変した。日雇労働の多くは建築関連であり、日雇労働者は現場が忙しいときだけの臨時労働者として雇われていたのであるが、90年代初めのバブル崩壊によって不動産価格が急落し、建設業が停滞したことで仕事に就くことすら厳しくなったのである。90年代終わりごろには多くの日雇労働者が仕事探しを諦め、また簡易宿泊所の宿代を払えなくなったためにホームレスとなっていき、ドヤ街はホームレスの街へとなっていった。とこ

ろが平成 14 年に「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法（以下、ホームレス自立支援法）」が施行されたことで転機を迎える。この法律に基づいて国と地方自治体は、ホームレス状態になった人々を路上生活から脱却させ、社会復帰を手助けするべく、自立支援施設の建設を進めたのである。ホームレス自立支援法の施行は 90 年代半ばの生活保護の受給要件の緩和も相まって、ホームレスを大きく減少させるに至った。そして現在では、簡易宿泊所に暮らす人の 8 割以上が生活保護に頼っている状態である。高齢化も進行していて、60 歳以上の滞在者の割合が平成 2 年は 13%程度だったのに対し、平成 26 年では 68%に達していて、平成 26 年当時の人口推計の 60 歳以上の割合 (33.0%) を大きく超えている (平成 30 年度は 34.1%)。

このように、1950 年代～1980 年代に全盛期を迎えた日雇労働者の街は、1990 年代にはバブル崩壊とともにホームレスの街となり、2000 年代以降は生活保護受給者と高齢者の街へとすでに変容していることが分かる。

そして、この生活保護受給者と高齢者の街には課題点がいくつか考えられる。1 つは地域コミュニティの希薄さだ。生活困窮者や高齢者のほかにも地域住民や外国人が街の中に居ながらもお互いが同じ場所に集まって交流することがなく、助け合うといったこともせず、それぞれの人たちがそれぞれの生活をしているがために、生活困窮者や高齢者が孤独のまま死んでしまう、いわゆる孤独死という問題に直面する。ほかにも、日雇労働者にとってお酒を飲むことが日課となっていたことから発生する肝硬変やてんかん発作、高血圧などの健康問題、喧嘩による火傷や怪我の数が深刻であること、今後この街を振興していくために街に興味を持ってくれる外部の人たちが入っていきやすい入口やきっかけを作っていかなければいけないといった課題もある。

1-3 研究方法・論文構成

第 2 章では山谷地域の概要及び歴史、現況をまとめる。山谷がなぜこの時期、この場所で「日雇労働者のまち」と呼ばれるような街が形成されたのか、また「日雇労働者のまち」として形成された山谷がどのように成熟し、時代の象徴となるまで発展したのか、そして現在のように高齢者が多く居住する超高齢社会・都市型限界集落へとどのように変容していったのかを、山谷の住人を中心とした歴史から見ていく。ほかの街とは違い、住人たちの感情が表れやすい街だからこそ、それぞれの時代の住人たちの感情を中心に考えていくことで、山谷の変容のメカニズムを解明できるのではないかと考えた。第 3 章では、第 2 章の山谷の現在までの変化のプロセスを踏まえて、現在抱えている問題に対して各団体がどのようなアプローチで解決を図っているのかを見ていく。第 4 章では、第 3 章の各団体の活動を山谷が現在抱えている問題ごとに分類したのちに、それらの活動がどのような影響や変化を山谷にもたらしているかを考えていき、また、それらの活動ごとに抱えている問題を再度考察し、今現在の山谷の姿について明らかにしていく。そして、第 5 章の総括では山谷の街

の変化の要因とメカニズムについて、他の地域で深刻化する社会問題についても触れつつ、結論を出していく。

第2章：研究地域の概要及び歴史、現況

2-1 研究地域の概要

現在の住居表示でいうと、東京都の台東区清川、日本堤、橋場と荒川区南千住にまたがる約 1.65 km²の広さの地域を指す。戦後の復興期から高度経済成長期にかけて、東京の土木・建築業などに従事する日雇労働者が多く住み、季節労働者や出稼ぎの人も多く集まっていた。日雇労働者市場や寄せ場と呼ばれていて、大阪の西成区（あいりん地区、釜ヶ崎とも言う）、横浜の寿町と共に三大寄せ場と呼ばれていた。

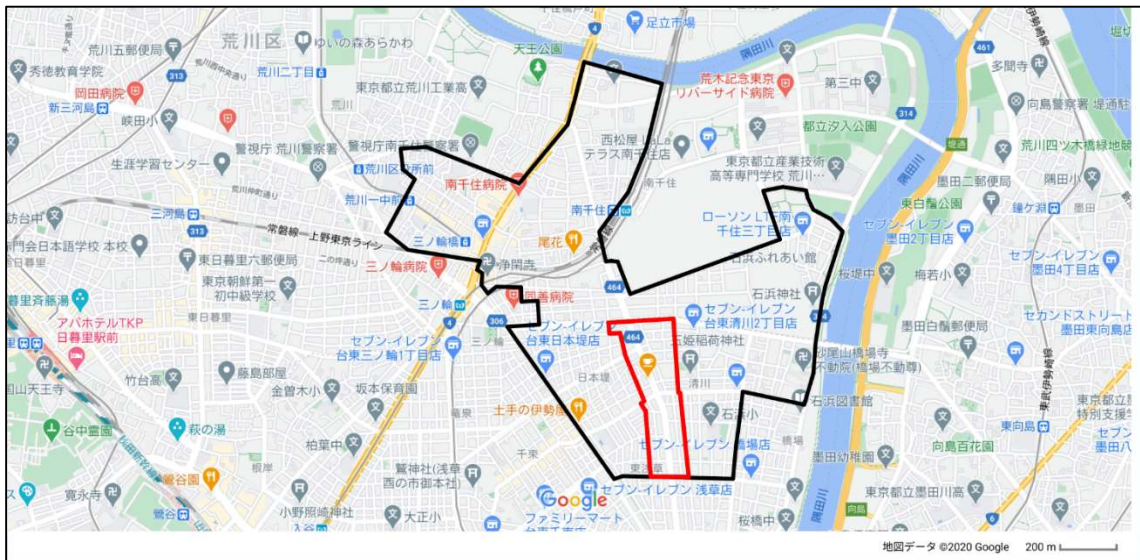


図1 山谷地域（黒枠）と、旧地名としての山谷（赤枠）

日雇労働者の人たちは、その名のとおり日雇での就労であるため、仕事の求人数が不安定であったり、本人に就労の意思がないといったことから、収入は安定せず、常に増減する。そうなるとお金がないためにドヤ(簡易宿泊所)に泊まれず、野宿せざるを得ない状況になってしまうことがある。これを労働者の人達は「アオカン」と言っている。語源は「青空簡易宿泊」の略だといわれているが、実際は不明である。今で言うところの路上生活者やホームレスに近いのであろうが、そういった意味では、山谷地域では道端で寝転んでいる人というのは昔から珍しくはなかったのである。歴史的には、江戸時代から山谷地域の原型はあり、木賃宿（食事を提供しない素泊まり専門の旅館）が多く立ち並んでいたようである。その頃は奥州街道や日光街道の江戸方面の最初の宿場町であった。山谷地域のシンボルとも言える泪橋交差点は、現在は交差点の名前だけで橋はないが、昔は橋があり、橋を越えたところに小塚原処刑場があったことから、囚人やその家族などが涙したとして泪橋となったといわれている。処刑場の近くであって、しかも近くには遊郭として有名な吉原があったため、

表現が悪いが下層階級の地域であったといえる。近代になり、戦前より既に多くの貧困層や労働者が居住していたが、戦後になると、東京都とGHQによって戦争被災者のための仮の宿泊施設（テント村）が用意され、これらが本建築のドヤへと変わっていったようである。昭和30年代以降、山谷地域では、警官と労働者の間で何度も暴動（山谷騒動）が起こった。つい最近まで「1人では怖くて歩けない」というイメージができてしまったのはこの暴動のイメージからであると思われる。また、山谷という地名は、昭和41年の住居表示改正でなくなってしまっている。住居のない路上生活者やホームレスと呼ばれる人たちは不況とともに増加傾向にあったものの、平成14年に成立した、ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法（通称、ホームレス自立支援法）によって、簡易宿泊所においても生活保護を受けられるようになったため、現在は減少傾向が続いている。

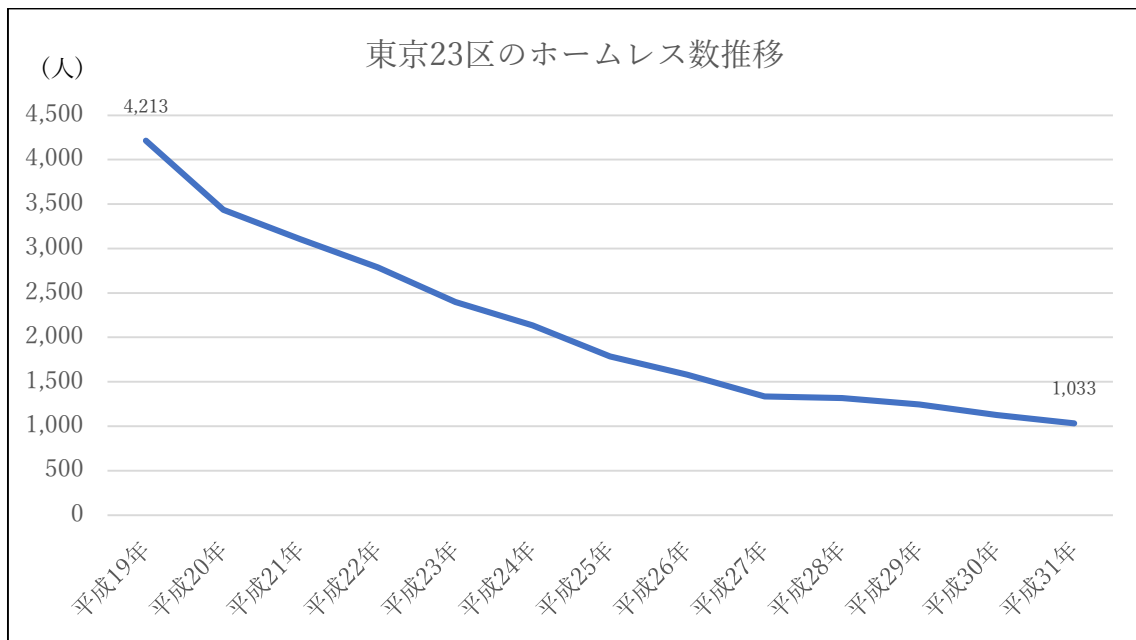


図2 東京23区のホームレス数の推移（ホームレスの実態に関する全国調査：厚生労働省）

この地域の特徴から、様々な文学作品の舞台となることが多く、ちばてつや氏の漫画「あしたのジョー」では、主人公の矢吹ジョーが通うボクシングジムの丹下ジムが、山谷の中心に存在した泪橋の下にあるという設定になっている。



図3 あしたのジョー像

2-1-1 ドヤ（簡易宿泊所）と宿泊者について

「ドヤ」とは、正しくは簡易宿泊所もしくは簡易旅館と呼ばれているものである。山谷地域にあるドヤの殆どは、宿泊所、旅館と言っても素泊まりの宿（食事などが提供されず、泊まる場所・部屋のみの宿）で1泊や2泊でも泊まることは可能だが、多くの場合は長期間滞在する傾向にあり、高度経済成長期の土木・建築業等を支えた日雇労働者が多く住むところであった。1950年代の最盛期では、ドヤは222軒、収容数は15,000人分にのびたが、現在では177軒、6,500名ほどである。

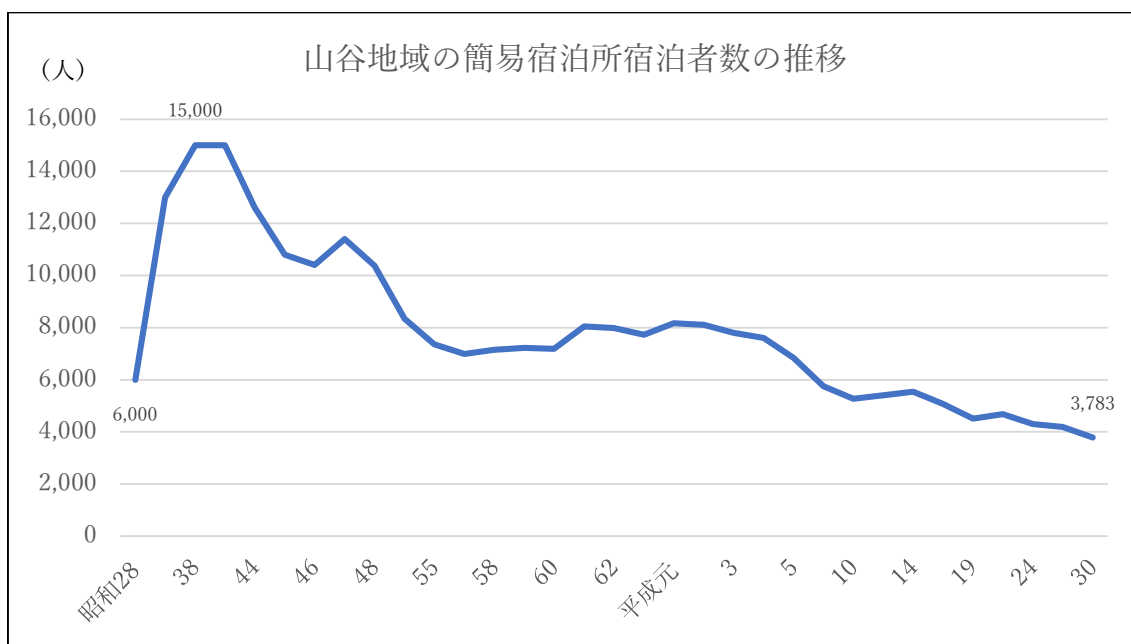


図3 山谷地域の簡易宿泊所宿泊者数の推移（山谷地域主要統計：東京都福祉保健局）

一日の宿泊代は、おおむね個室で1泊1,800円から2,500円ほどであるが、古い所であったりすると個室ではなく二段ベッドであったり、個室でも1~2畳と狭い間取りになっていて1,000円台前半のところもある。山谷地域のシンボルになっている表通りに面したドヤは一番安い料金が1,000円ほどで、二段ベッドが並ぶ8人部屋である。最近できた新しい所では、3,000円台の価格に設定している傾向があり、安いビジネスホテルといった感じである。平成14年のサッカーワールドカップ以降は、外国人の旅行客の利用が増え、そういったビジネスホテル形態のものが増えている。「労働者の街」であったことから、女性がこの街を一人で歩く姿は皆無であったが、最近は雰囲気も変わり、それに合わせて女性が泊まりやすいビジネスホテル風の新しいところも出来てきている。



図4 簡易宿泊所の看板の例

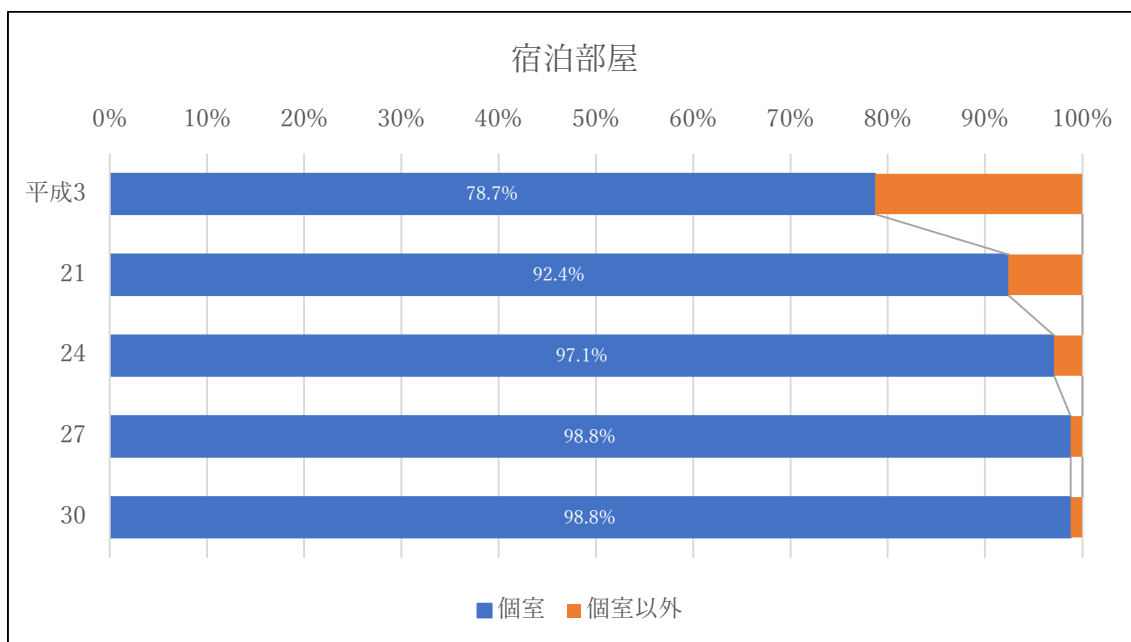


図5 宿泊部屋の種類の推移（山谷地域 宿泊者とその生活：東京都福祉保健局）

そもそもドヤに住んでいる人達はどのような人達なのかというと、前述しているように古くからの日雇労働者や、最近増えている外国人旅行者の他に、生活保護受給者も多い。バブル経済崩壊後の1990年代後半、不況により増え続ける路上生活者への対策として、東京都内の各区は、自区内の路上生活者に生活保護を適応し、自区内での住居が決まるまで山谷地域のドヤに預けるようになった。くしくも不況のため土木建築業は衰退し、仕事がなくな

った日雇労働者がドヤの料金を払えず、空き部屋が目立ち始めたところで需要と供給が合った形になった。この生活保護の形は「ドヤ保護」と呼ばれていたが、自区内のアパートに移るにも保証人などの問題もあり、ドヤに長期にわたって住所不定（ドヤは旅館のようなものであるから住所の設定は出来ない）のままになっている人が少なくなかった。そのような問題をはらんだ「ドヤ保護」は、最近では各区とも抑制気味になっているが、いまだにドヤに住む生活保護受給者は多く、結果的にかつて「労働者の街」と呼ばれた山谷地域は、「福祉の街」や「棄民の街（棄民とは、棄てられた人たちという意味で、生活保護はついているが生活保護の担当者は全く訪問もせずドヤに入れっ放しにしているため、病気になっても死にそうになっても誰も知らない状況になっているということである。）」と呼ばれるようになった。実際、数年前までドヤで凍死や、餓死、変死してしまう人は、年間50人以上いた。生活保護を受けていないにしても、山谷地域の日雇労働者には「アブレ手当」というものが存在している。アブレ手当は、病気や天候不順などによって、一時的に仕事が中断された短期的な失業状態に対して支払われる日雇雇用保険による給付のことである。この失業手当を受け取るには、被保険者手帳（白手帳）をまず取得する必要がある。働いた日は雇い主が印紙を一枚貼る決まりがあり、2ヶ月で26枚分働けば、翌月に一定の期間、1日最高7,500円を受け取ることができる仕組みになっており、このアブレ手当を上手に使い、仕事がなくとも生活保護を受けずにドヤに住んでいる人もいる。

以上より、現在のドヤの住人は、日雇労働者、外国人旅行者、生活保護受給者、そして、アブレ手当の受給者で構成されている。外国人旅行者以外の人たちは、総じて高齢者や慢性疾患の患者が多い。日雇労働者は、高度経済成長期の働き手であったため現在は高齢になっている。生活保護受給者は、働けないからこそ生活保護になるのだから、高齢者や病気の人である。アブレ手当の受給者も日雇労働者と同じである。このことから、ドヤは高齢で病気を持った人が多く、したがって医療や、介護、支援が必要な人が多い地域なのである。実際に、平成23年の統計では、ドヤの長期宿泊者のうち、68%が60歳以上の人となっている。

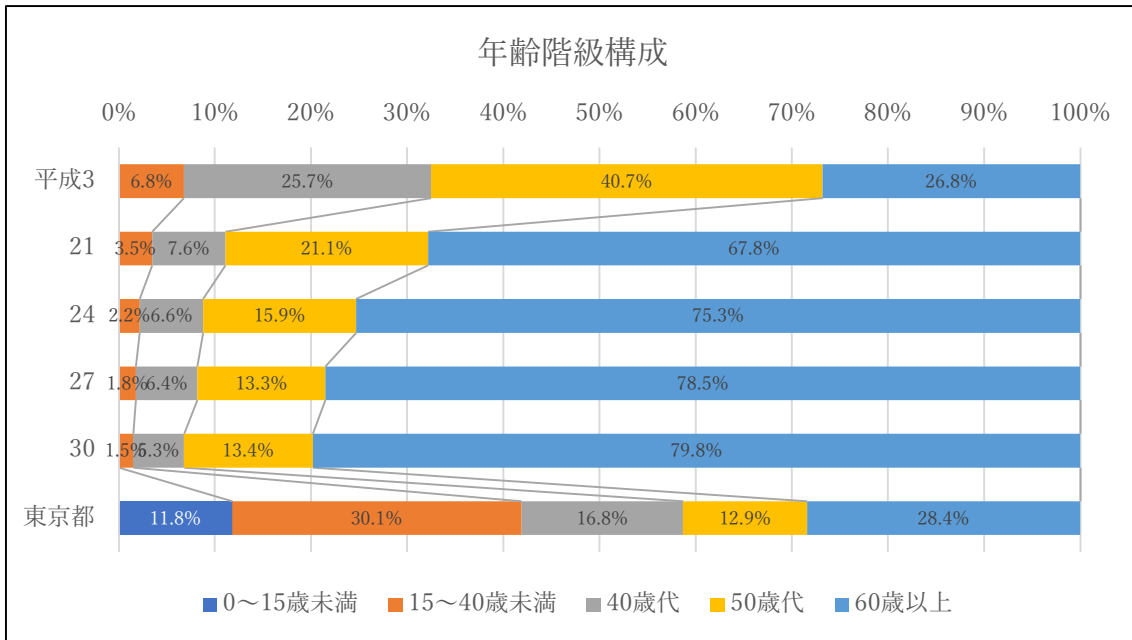


図6 山谷地域の年齢階級構成（山谷地域 宿泊者とその生活：東京都福祉保健局）

2-2 歴史

次に山谷の歴史を調査した。

2-2-1 江戸末期～昭和（戦前）

山谷は江戸時代から既に、奥州街道や日光街道の江戸の入り口として宿場町のような形で発展していた。山谷の中心部分には、明治通りと吉野通りが交わる泪橋交差点があり、ここには以前、「泪橋」という橋が架かっていた。江戸時代には泪橋を渡った先に小塚原処刑場があり、小塚原へと連れていかれる罪人はこの泪橋を渡るため、見送る人たちはこの泪橋で別れる悲しみから涙することから、泪橋という名前がついたと言われ、様々なものからの別れの象徴として今も有名である。また、小塚原処刑場は、杉田玄白らが解体新書を発刊するにあたって実際に解剖した地であり、また、安政の大獄の処刑地でもあり、安政の大獄によって命を落とした吉田松陰や橋本佐内の墓が現存する。明治時代以後は木賃宿街として旅行者や行商人、遊芸人といった人が多く宿泊する街であった。しかし、時代の変革とともに、生活の根拠を失った士族や職人、過去に身分差別を受けていた人々、土地を失った農民が生活困窮層として住み着くようになり、明治時代後半には山谷地域を含む、当時の浅草区は最も貧困者の多い地区といわれるようになった。当時の区内には江戸時代以来からの三大スラム（上野駅近くの下谷万年町、浜松駅近くの芝新網町、赤坂離宮近くの四谷鮫河橋）

と呼ばれる地域が存在していたが、山谷では決して貧困度合いが緩やかだったというわけではないものの、三大スラムのような地域は形成されなかった。一方で隅田川沿いの白鬚橋～桜橋間の橋場と呼ばれる地域には高級住宅地域が広がっており、大名や豪商の別荘、明治期には実業家や高官、歌舞伎役者などの別宅が存在し、中には三条実美や松平春嶽、諸藩の藩主の邸宅も存在した。貧困者の多い地区に隣接するように高級住宅地域が形成された理由として、川べりが風光明媚であった点や、なにより吉原遊郭に通いやすかった点が挙げられる。

東京の市街地化が進むに伴って、生活困窮層が住む場所に対し規制が行われるようになった。明治 20 年に宿屋営業取締規則が定められ、木賃宿は 17 の特定の地域のみで営業を強いられるようになり、山谷では浅草区浅草町で営業を許可されたことで、木賃宿がより集中するようになった。しかし、大正 12 年の関東大震災によって東京の市街地の大半が焼失し、三大スラムや新たに形成された多くのスラムも焼失した。そして、震災後に行われた区画整理事業によって、それらのスラムは消滅していったのである。山谷でも震災によって甚大な被害を受け、木賃宿街は壊滅状態に陥ったものの、間もなく復興し、約 100 軒の木賃宿ができ、約 5,000 人の日雇労働者が宿泊するようになった（山谷労働センター、1996 年、PP.2）ことで、以前のスラム的な様相は消え、街頭での雇用の取引が盛んになった。この頃から山谷が労働者と宿泊の街へと形成されていくこととなる。

2-2-2 終戦からの復興

昭和 20 年 3 月 10 日の東京大空襲によりドヤ街はすべて失われ、間もなく敗戦を迎えた。当時は資材が著しく欠乏していたため再建が困難であったが、地方から資材を調達することにより、3 畳 1 間ほどの広さの宿泊所が昭和 25 年ごろまでに 30～40 軒ほど建てられた（山谷労働センター、1996 年、PP.2）ことで一応の復興を果たしたものの、終戦当時の労働者は住む家がなく、宿泊所に宿泊することもできずに、浮浪者と同様な生活を送る者が多かった。また同時に上野駅周辺では、地下道で生活する戦災者や孤児、引揚者であふれており、GHQ からの要請を受けた東京都は、再建のための建築資材の払い下げを請願していた山谷の木賃宿経営者たちに、旧陸軍のテントやベッドを払い下げる代わりとして、上野の住宅困窮者の収容を依頼した。それにより、テント 1 つあたり 10 畳の広さで、8～10 人を宿泊させ、そのようなテントが 2～3 つから 10 ほど集まる規模の宿泊所が 10 か所ほど作られ、数百人が宿泊するようになった（山谷労働センター、1996 年、PP.3-4）。このテントの宿泊者たちはモク拾い（タバコの吸殻を拾う仕事）や靴磨き、進駐軍の荷役といった仕事をし、収入を得ていたという。この払い下げられたテントによって形成されたドヤは、床が土のままであったり、劣化による雨や風の漏れ、積雪による崩壊が発生し、建て直しが求められるようになったが、しっかりと宿泊施設を建築してしまうと、宿泊料の大幅な値上げが避けられなかったため、2 段ベッドを並べることで収容人数を大幅に増やすことができる、カ

イコ棚式のベッドハウスが考案された。これにより、山谷のテントドヤは徐々に消滅していき、昭和 27,8 年ごろにはほとんどが、カイコ棚式や大部屋式、個室式のドヤ街へと変化していき、戦前の山谷の姿へとほぼ同様に復興した。

昭和 30 年ごろまでは青空市場と呼ばれる、日雇労働者の市場が山谷ではなく、現在の三ノ輪橋付近にあり、そこで小さい規模ながら、労働者と手配師が直接取引をしていた。しかし、昭和 29 年 11 月から 32 年 6 月にかけての神武景気によって、労働者が仕事を求めて群をなすようになり、早朝から手配師たちがトラックを連ねてこの寄せ場に訪れて、労働者たちをそのトラックに満載し、それぞれの現場へ移動する姿がよく見られるようになるなど、急激に規模が拡大したことによって、付近の町内会から苦情が再三出される事態となり、東京都の積極的な措置によって、青空市場は汨橋周辺へと移動した。このことにより、山谷は労働者の街の側面をより強めることとなった。

2-2-3 山谷暴動と「センター」の設立

	発生日時	内容	検挙数	負傷者数
1	1/1	群衆約1,000人がマンモス交番に押しかけ、投石暴行	4人	
2	7/26	マンモス交番への投石暴行	4人	19人
3	8/1	約400人がマンモス交番を襲撃	17人	66人
4	8/3 ~ 8/8	延べ6,000人がマンモス交番に押しかけ、投石暴行	23人	19人
5	昭和37年 11/23	食堂破壊、マンモス交番に1,600人押しかけ、投石暴行	16人	9人
6	昭和39年 6/16	約2,000人がマンモス交番に押し寄せ、投石暴行	12人	24人
7	8/14	約1,300人がマンモス交番に投石暴行	4人	3人
8	昭和41年 8/27 ~ 9/3	マンモス交番、石浜町交番、パチンコ店、自動車等に放火を含む投石暴行	62人	多数
9	昭和42年 8/17 ~ 8/19	マンモス交番、パチンコ店、自動車、一般民家商店等に投石暴行	37人	
10	6/15	500人の群衆が発生		
11	6/17	約2,000人がマンモス交番に押し寄せ、放火、投石暴行	24人	多数
12	昭和43年 6/20	マンモス交番で警察官やパトカーに暴行	4人	
13	7/9	約1,200人がマンモス交番、田中町交番に投石暴行、周辺のタクシー、トラックを破壊	14人	
14	11/5	約50人が都庁第一庁舎に乱入	30人	

図7 主な山谷暴動一覧（城北福祉センター 30年のあゆみ：東京都城北福祉センター）

このような山谷のドヤ街が全国的に認識されるようになったのは、昭和 35 年 8 月 1 日に発生した暴動がきっかけであるといわれている。この暴動は、ドヤの従業員と宿泊者の間で発生した喧嘩に対する処置をめぐる、約 400 人の山谷の住人たちが 7 月にできたばかりのマンモス交番を襲ったことで、17 人が検挙、66 人が負傷する事態へと発展したものである。さらに、別件の酔っ払いへの取り扱いをめぐる、8 月 3 日から 8 日にかけて、計 6,000 人がマンモス交番に押し掛け、23 人が検挙、19 人の負傷者が発生した（東京都労働局職業安定部労働課、1969 年、PP.105-107）。この騒動が社会問題として新聞といったマスコミに大々的に取り上げられることで山谷の知名度や注目度が急上昇したのである。またこういった騒動が夏に集中した要因の 1 つとして、ノミやシラミ、南京虫の存在があるといわれている。特に夏になると南京虫が部屋中を徘徊するためにとっても寝られる状態ではなかった

らしく、そんな南京虫を避けるため、外で涼みながら一晩明かすのも珍しくなく、山谷の住人をいらだたせることとなったそう（山谷労働センター、1996年、PP.4）。昭和37年11月23日にも、あさひ食堂での従業員と労働者の争いから暴動へと発展したことを受けて、生活や労働、教育といった対策を総合的に行うべきということが協議され、東京都城北福祉センターと財団法人山谷労働センターの設立へとつながった（平成15年4月にこの2つの組織は統合され、平成23年4月に「公益財団法人城北労働・福祉センター」となり現在に至る）。そもそも労働面について本来は、公共職業安定所（職安）によって対策されるべきであるが、山谷地域の特徴として、簡易宿泊所で生活し、特定の住所を持たない人が多いことが挙げられ、そのような人たちは職安といった行政機関を敬遠しがちとなり、利用率もあまり高くならなかったため先述の通り、財団法人山谷労働センターを設立し、公共職業安定所といった行政機関と協力し、主に職業に関する相談や指導、就職に関する援助や保護を実施することになった。すでにこの頃には大阪府の西成あいりん地区に西成労働福祉センターが設立されていたが、都内近辺にはこういった機関が存在せず、手探り状態であったという（山谷労働センター、1996年、PP.6）。

2-2-4 「センター」開設当初の山谷の雰囲気と明らかになった問題

青空市場が近辺に存在していたこともあって、山谷労働センターの周辺は多くの手配師が徘徊しており、労働者や業者などは手配師の妨害によって山谷労働センターまでたどり着けないといったトラブルも多発したことで、開設当初はうまく機能することがなかった。昭和30～40年代当時の労働者は非常に若く、活気があり、粗暴で気が荒い面もあったため、労働センターの相談業務中も、大声をあげて喚き散らしたり、無理な相談を持ち掛けて、拒絶されると激昂し職員の胸ぐらをつかみかかるといった問題行動が日々見られた。また、手配師も数多くいて、旧日光街道（山谷通り）や明治通りが労働者と手配師であふれていたという時代背景もあり、手配師にとって賃金の不払いや労災の相談を労働センターにされては困るため、労働センター自体が大半の手配師から敵視されており、職員に対しての嫌がらせが絶えず発生した。労働者が労働センターにたどり着いて相談にこぎつけても、手配師や酔っ払いによる邪魔が入り、それが小競り合いへと発展し、收拾がつかなくなるのが日常茶飯事であった。次第に労働センター内は酔っ払いの集会場となり、酔っ払い同士の喧嘩が起きたり、酔いつぶれて地べたで寝てしまうケースが多く見られた。一時期、ベタスという薬の乱用が施設内で頻繁に行われるという事態にも陥っていた（山谷労働センター、1996年、PP.17）。

しかし、山谷労働センターは当初、労災や給料、手配師などといった労働問題に関する相談を受ける場所を作ることが労働者の求めるものであるという考えから、設立されたものであったものの、実際には仕事の紹介そのものを求める労働者が圧倒的に多かった。原因としては主に二点挙げられる。一点目は、山谷労働センターの周辺に職安の上野玉姫労働出張

所や足立河原町労働出張所があったものの、一般に本名や住居地の申告が必要な職安などの公的機関を山谷の労働者は嫌がった点である。二点目は、職安が紹介する仕事は、手配師が紹介する仕事より給料が安いことが多かったために、職安を敬遠し、新たにできた山谷労働センターに期待を寄せた点である。しかし、前述の通り、山谷労働センターは労働問題に関する相談を受ける場所として設立されたものであったために、労働者の期待に対し当初は応えることができていなかった。あまりにも多くの労働者が職業紹介を求めてきたことをうけて、山谷労働センターでは昭和41年8月より紹介事業をするようになった。当時は昭和40年11月から続く、いざなぎ景気の真ただ中であつたため好条件の求人が多く、また労働センターが事業所と労働者の間を取り持つために、事業所と労働者の双方にとっての安心感や信頼感から、労働センターが取り扱う求人数は急増した。また、当時の求人については、ほとんどが港湾や運輸、倉庫、工場での雑役といった内容の日払いであり、建設業はそれほど多くはなかった。建設業の求人が少なかった理由として、事業所と手配師のつながりが強く、山谷労働センターに求人を出す事業所が少なかったことや、個人の技量が問われる業種であるため、労働者一人一人の技量を把握している手配師に依頼するほうが効率よく仕事を進めることができたこと、そもそも建設業の求人が長期のものが多かったため、束縛を嫌う山谷の労働者には不人気であつたことが挙げられる。特に昭和40年代のいざなぎ景気による好景気によって、仕事の求人が豊富にあり、労働者側は仕事を選び好みできるほどの余裕があつたのである。また、山谷の労働者に最も人気があつた求人職種は、給料といった待遇面がその他の一般土木と比べても勝っていた港湾求人であり、センター設立当時は求人の5割以上を占めるほどであつた（山谷労働センター、1996年、PP.13）。ほかにも山谷近辺の商店や町工場などからの求人も少しあつたが、そのほとんどが山谷の労働者の性格に合わない長期求人であつたために不人気であつた。

労働センターが受けた相談の内容のほとんどは給料と労災に関するもので、特に給料問題の大部分が労働者自身の契約違反によるものであつた。山谷の労働者たちの大半は束縛を嫌い、契約を順守するという意思が希薄であつたため、途中で仕事を投げ出すといったことが後を絶たず、それでも給料の支払いは要求するといったケースも数多く見られた。ほかにも計画的に労災問題へと発展させるケースも多く、手配師がグルとなって事故をでっちあげるといった件も見られた。昭和40年代前半は手配師が100から200名ほどいた（山谷労働センター、1996年、PP.18）といわれており、手配師による不正が増えていたことから、労働者だけでなく、一部の事業所も手配師排除を求める声が上がっていた。しかし、積極的に手配師を利用する事業所が存在したのも事実で、なかなか手配師排除は進まなかつた。

2-2-5 活発化する労働運動と不況

山谷ではたびたび暴動が発生していたが、それらは昭和42年までは労働者同士のちょっ

とした喧嘩や警察官・商店の従業員からの扱いへの反発といった、比較的小規模で自然発生的な暴動が多かったものの、昭和 43 年頃から、「運動」の意味合いが出てくるようになった。昭和 43 年 6 月 18 日には少人数の運動家たちがデモ行進をしながら交番へ流れ込んでいって暴動事件へと発展したことがあり、また、昭和 40 年代後半になると就労者団体による「現場闘争」が活発に行われるようになった。そして、昭和 47 年には冬場に求人が急減したことで、仕事の紹介件数を増やすよう訴える活動家の煽動によって暴徒化した労働者たちによる山谷労働センターへの焼き打ち事件が発生するなど、暴動に「運動」の側面が強くなっていくようになった。

そんななか、昭和 48 年 10 月 6 日に勃発した第 4 次中東戦争による第 1 次石油ショックによって、山谷は大きな影響を受けた。特に昭和 41 年より施行された港湾労働法によって規制され、求人数の減少が続いていた港湾関係の仕事は、第 1 次石油ショックによる不況によって、作業の機械化・合理化がより一層進行し、単純労働者を雇用する必要性を失うこととなった。この第 1 次石油ショックは、昭和 30～40 年代の労働者があふれる活発な山谷の街を、不況を象徴する街へと変化させる大きなきっかけとなった。港湾作業の求人が減少し、建設業の長期の仕事を選ぶ労働者も増えたことから、この時期からすでに仕事の選り好みをしている余裕がなくなっていることがわかる。

昭和 54 年には日本で第 2 次石油ショックが発生し、第 1 次と同様に山谷には大きな影響を与えた。昭和 40 年代は手配師であふれていた山谷から第 2 次石油ショックを受けて、多くの手配師が姿を消した。そもそも昭和 50 年代より盛んにおこなわれていた手配師撲滅運動とともに、事業所に紹介をしていないのにもかかわらず金銭を要求したり、人数合わせだけで質の良い労働者を紹介できなくなったりした手配師自体の質の低下を受けて、事業所側も見切りをつけ不要とし始めたことから、多くの手配師は山谷から撤退し、近隣の浅草などに拠点を移したのである。しかし、山谷では暴力団と左翼系就労者団体の対立による抗争の激化も目立つようになったことで事件事故が頻発し、安心して暮らすことができない街となった。

2-2-6 労働者と図書館のかかわり

山谷地域には 3 つの図書館が存在する。いずれも昭和 40 年代後半に開館した図書館であり、開館当時から山谷に深くかかわってきている。たとえば、台東区立石浜図書館では以前、館内のどこでトラブルが発生したかを知らせる警報ランプが備え付けられていた。これは山谷の労働者と思われる悪質な利用者によるトラブルに対処するためであったといわれるほどに労働者の利用者数は多かった。特に、山谷の労働者の多くは体力を使う日雇労働に従事しているため、仕事があったとしても毎日続けてできるような仕事ではない。そのため、必然的にやることのない日が生まれ、その暇な時間をつぶすのに図書館はうってつけの場所だったのである。しかし、労働者たちは図書館に来て読書をするわけではなく、大半は閲

覧室でぼんやりしているか、熟睡して一日を過ごしていた。中には飲酒や賭博を行う者や、ところ構わず糞尿を排泄する者、仲間同士の喧嘩や職員への暴力をふるう者なども現れた。こういった状況は、ほかの2つの図書館の、台東区立根岸図書館、荒川区立南千住図書館でも見られ、耐えきれなくなった近隣住民は労働者を図書館から排除することを図書館に要求した。しかし、その要求を受け入れることは図書館の「利用者を差別しない」という理念に反することであったため容易ではなく、結果的に石浜図書館では閲覧席の廃止によって、そして根岸図書館と南千住図書館では「研究目的」や「女性のみ」といった利用制限付きのコーナーを設けることで、実質的に労働者を排除したのである。なお、現在でも石浜図書館には閲覧席がないままだが、労働者の居場所としての図書館の姿は三館とも見られなくなっている。

2-2-7 バブル景気の到来と崩壊による山谷の変化

昭和48年の第1次石油ショック以来、10数年間不況による低迷を続けた山谷であったが、昭和60年代に入ると、バブル景気によって回復に転じた。政府による建設国債の増発が地価や株価の暴騰を招く形で、バブル景気は発生したのだが、特に首都圏の地価暴騰は建設業関係に対し大きな影響を与え、建設業の求人への一本化が進んでいた山谷でも、求人の大幅な増加による人手不足が深刻化する事態となった。特に大工といった技能労働者の不足は深刻で、単純労働者の多い山谷では求人枠がなかなか埋まらなかった。また、求人数の増加によって仕事の選り好みができる余裕が再び生まれたことにより、就労の意志を示さず、着の身着のままその日暮らしの生活へと戻る労働者が増加した。そのため、バブル景気によって求人数は大幅に増加したものの、紹介数自体はそこまで増えなかったのである。また景気が良くなったことで、ほとんどの簡易宿泊所は満室となり、宿泊所側も泊ませる客の選り好みをするところが発生した。宿泊所も従来までの木造の相部屋式ベッドハウスの数が急減し、よりきれいなホテルへと改装されていった。個室式が増え、個室には冷暖房が完備され、テレビや冷蔵庫が置かれるようになり、それに伴って一泊800円～1,200円ほどだった宿泊料が2,000円～2,800円へと高騰したが、それでもほとんどの部屋が満室になる状態がしばらく続いた（山谷労働センター、1996年、PP.53-54）。ほかにもビジネスホテルへと営業形態を変更する宿泊所も出てきた。しかし、戦後2番目の長さとなったバブル景気であったが、平成3年についに崩壊し、建設業一本化が大きく進んだ山谷では、バブル崩壊によって大量の解雇や求人の急減をもたらし、日雇労働市場に多大な被害を与えることとなった。ドヤ街はバブルが崩壊した後も好景気がしばらく尾を引いていたが、バブル崩壊から1年も経つと、8,000人の収容能力を持ちながらも、5,000～6,000人ほどしか宿泊せず、宿泊者数の減少という形で不況の様子が見られるようになった。また、2回の石油ショックによって減少傾向にあった手配師もバブル崩壊によってほぼ見られなくなった。原因として主に挙げられるのは、仕事の減少によって手配師を必要としなくなったこと、新聞で

の募集でも十分に人を集めることが可能であったこと、外国人労働者の雇用が増加したこと、労働者の高齢化によって就労しようとする労働者を探すことが困難になったことなどが挙げられるように、手配師の存在がより不必要になったのである。そして何よりも特徴的で、バブル崩壊後の不況時に見られた傾向として、労働者が事業所に対して賃上げをしないように求めるといったことがあった。当時、賃上げを求めている過去の春闘の結果、山谷での賃金相場は周辺地域よりも高くなっており、その結果、山谷よりも相場が低い新宿などに求人が流れることが増加し、山谷から求人が減る・なくなることが懸念されたために、賃上げをしないよう求める労働者が増加した（山谷労働センター、1996年、PP.55-56）。

2-2-8 簡易年表

江戸時代	奥州街道、日光街道の宿場町として発展
明治期	木賃宿街として発展
大正期	関東大震災により木賃宿はほぼ全焼
第2次世界大戦前	木賃宿が100軒を超える
第2次世界大戦後	戦災により焼け野原と化し、被災者は上野周辺に集中
昭和20年	治安への影響を重視したGHQが東京都に援護を要請し、山谷地域に仮設テント村を確保
昭和24年	「緊急失業対策法」の制定に伴い、戦後の復興に多くの日雇労働者が雇用されるなど労働需要が増加
昭和28年	テント村が本建築の簡易宿泊所へと変化していき、約100軒の簡易宿泊所に約6,000人が宿泊
昭和30年	日本経済の高度成長に伴い、土木・建築作業や港湾荷役作業における労働需要が高まり、全国有数の寄せ場に成長
昭和38年	222軒の簡易宿泊所に約15,000人が宿泊
昭和40年	東京都城北福祉センターと財団法人山谷労働センターが開設

2-3 現況

ここでは、『山谷地域 宿泊者とその生活』の昭和44年度版と平成30年度版の内容を比較していきつつ、山谷地域の現況について述べていきたい。

2-3-1 宿泊者について

山谷地域の宿泊者の平均年齢は 67.2 歳となっている。特に 65 歳以上の人の占める割合（高齢化率）が 68.4%と、日本全体の高齢化率である 27.7%の約 2.5 倍の値を示しており、ほかに類を見ない都市型限外集落の先進地域へと変化している。また、山谷といった、かつて労働者の街だった場所によく見られる傾向である、男女比の偏りについては平成 30 年度の調査では男性が全宿泊者の 99.7%を占めており、ここ 5 年間はあまり変化が見られないものの、じりじりと男性の比率が上昇している。

2-3-2 仕事について

雇用形態は、現在も日雇や長期の日雇が 4 割を占めており、昔からの山谷の雰囲気が残っている。しかし、近年は常雇いの割合が増加しており、日雇に並ぶ可能性がある。職種に関しても、石油ショックなどによる不況以来、土木建築が最も多くなっている。就労経路については、職安やセンターといった職業紹介機関からの経路が 3 割ほどなのに対し、友人や手配師など人とのつながりによる紹介が約 4 割となっていて、現在でも労働者同士や、手配師・事業所とのコミュニティが就労するうえで重要になっているのがわかる。賃金は年々、日雇も常雇いも同じく減少し続けており、日雇賃金の平均は 1 万円を切ることが大半となっている。また、雇用保険被保険者手帳（白手帳）の所持者数も半数近く減少していることから、労働者自体の減少も進んでいることがここでもわかる。

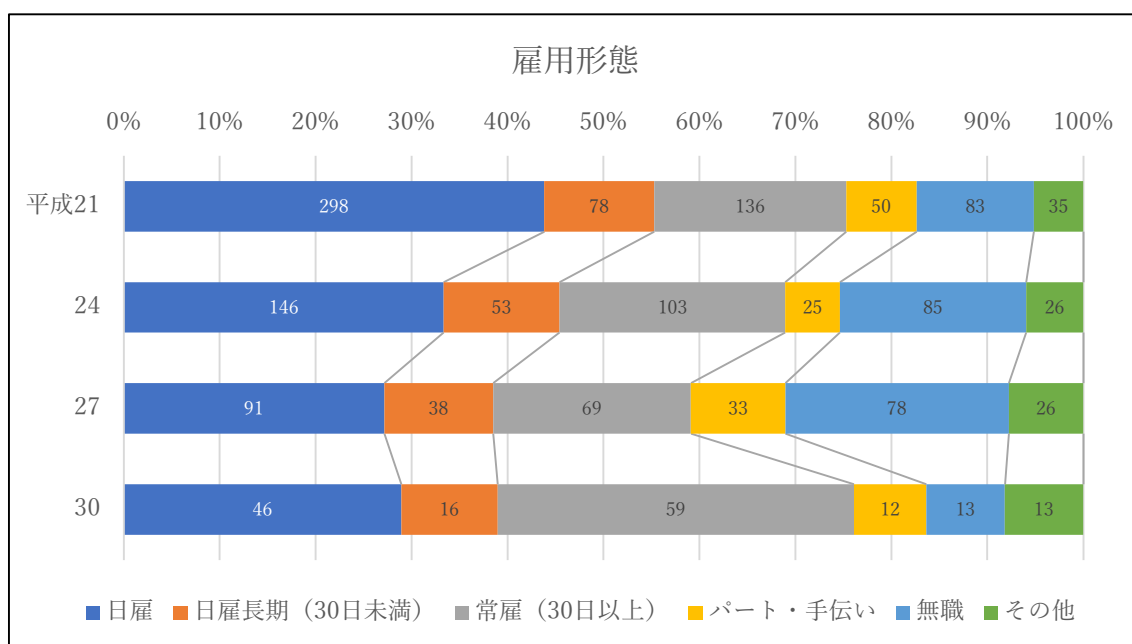


図 8 山谷地域の雇用形態（山谷地域 宿泊者とその生活：東京都福祉保健局）

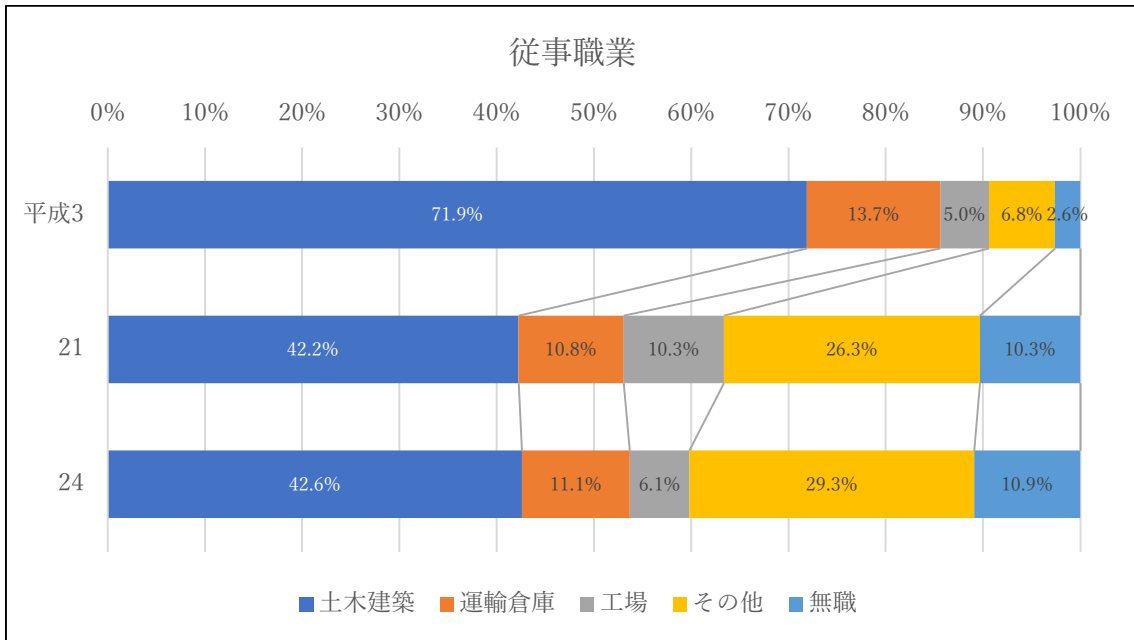
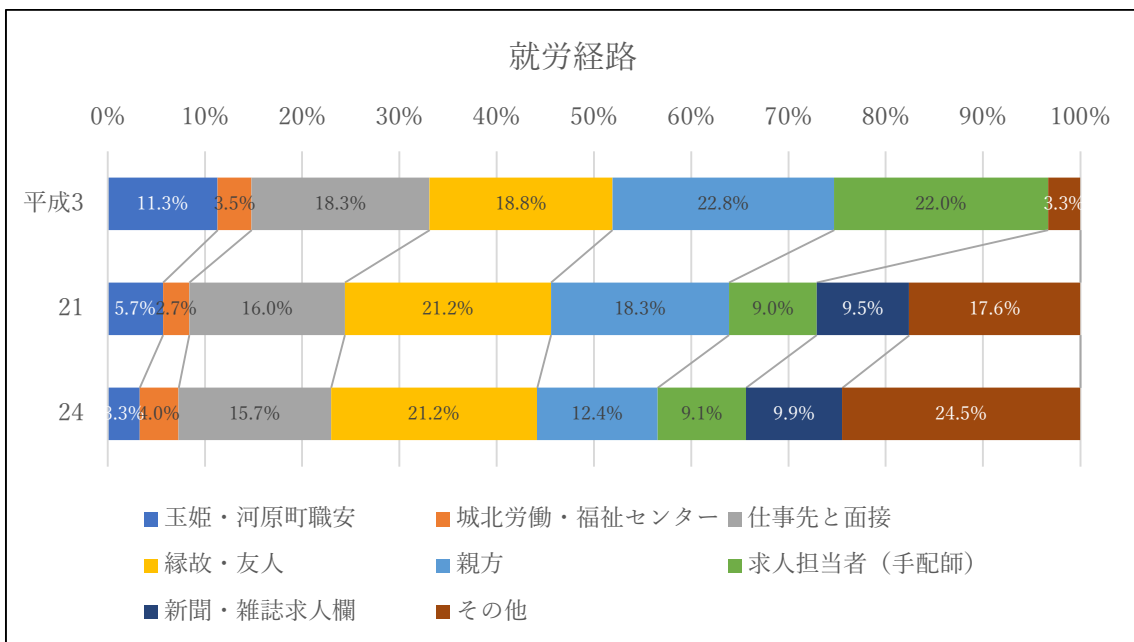


図9 山谷地域の住人が従事する職業（山谷地域 宿泊者とその生活：東京都福祉保健局）



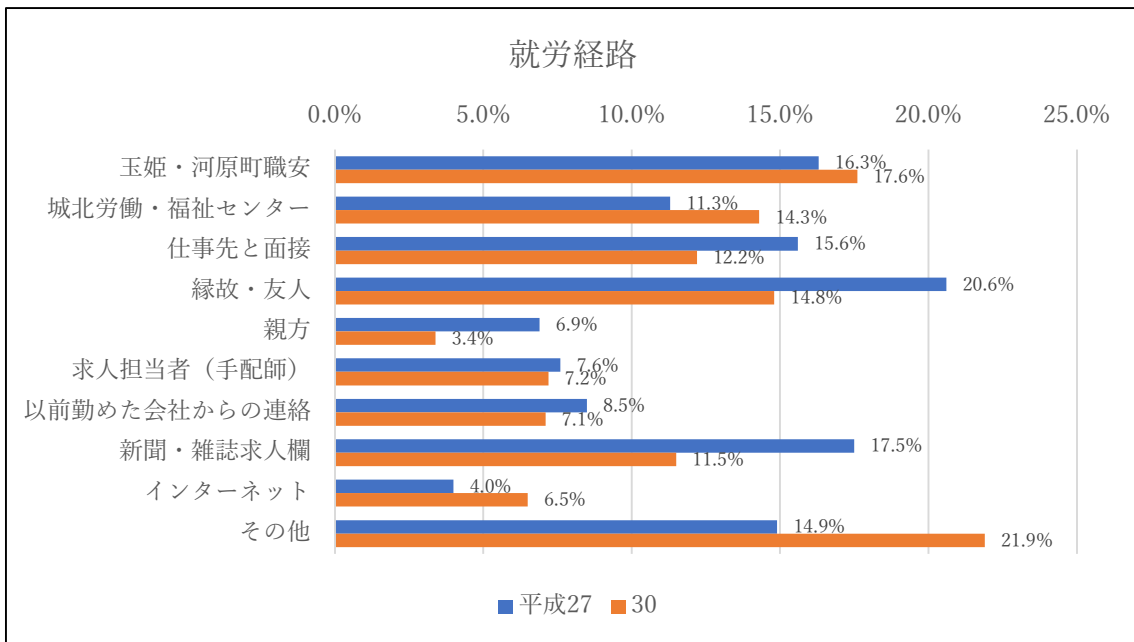


図 10,11 就労経路（山谷地域 宿泊者とその生活：東京都福祉保健局）

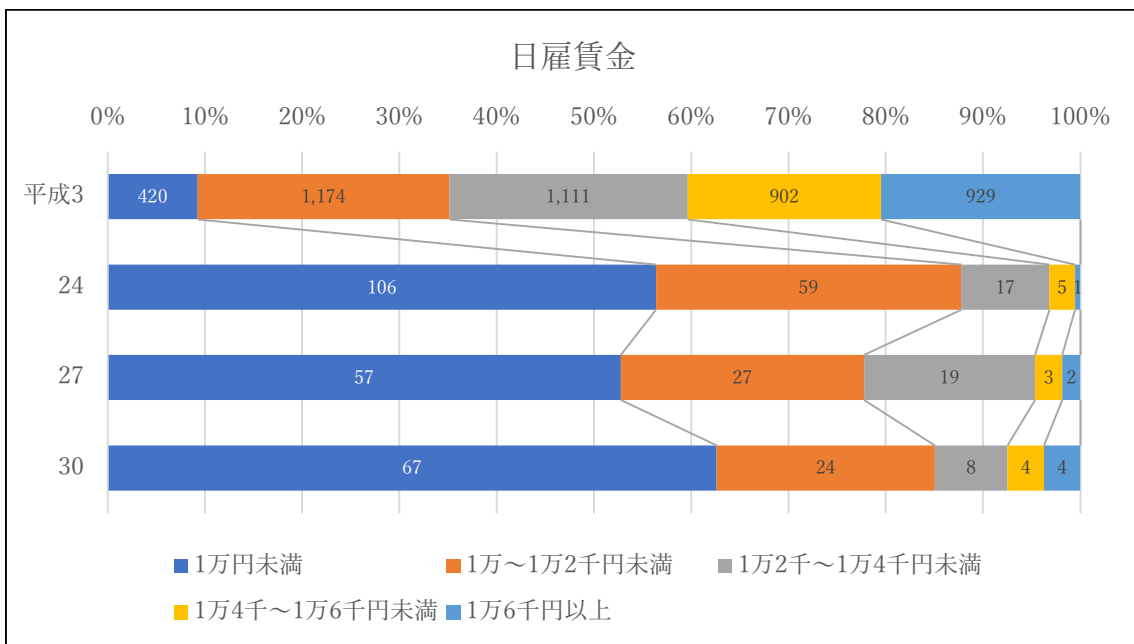


図 12 日雇賃金（山谷地域 宿泊者とその生活：東京都福祉保健局）

2-3-3 生活や健康面について

生活保護受給者の比率は昭和 44 年の 10%ほどから、90%近くへと上昇しており、労働者の高齢化による貧困化の傾向が全体的にみられる。また、住民登録も現在宿泊している宿泊

所で登録されている割合が8割を超えており、宿泊している部屋の形式は9割方個室で、さらに昼間は簡易宿泊所の部屋で過ごしている人が85%ほどとなっている。食事は大多数の人がコンビニ等で購入しており(90.1%)、1日2千円未満の食費で暮らしている(84.7%)。年金に関しても加入していない人が8割近く存在していることも特徴的である。また現状、山谷に住んでいてこれからも生活したいと考えている人の割合は73.2%を占めていて、特に長年生活してきたことによる馴染みや、山谷特有の周囲との付き合いに気を遣わずに済むという理由が多く見られた。

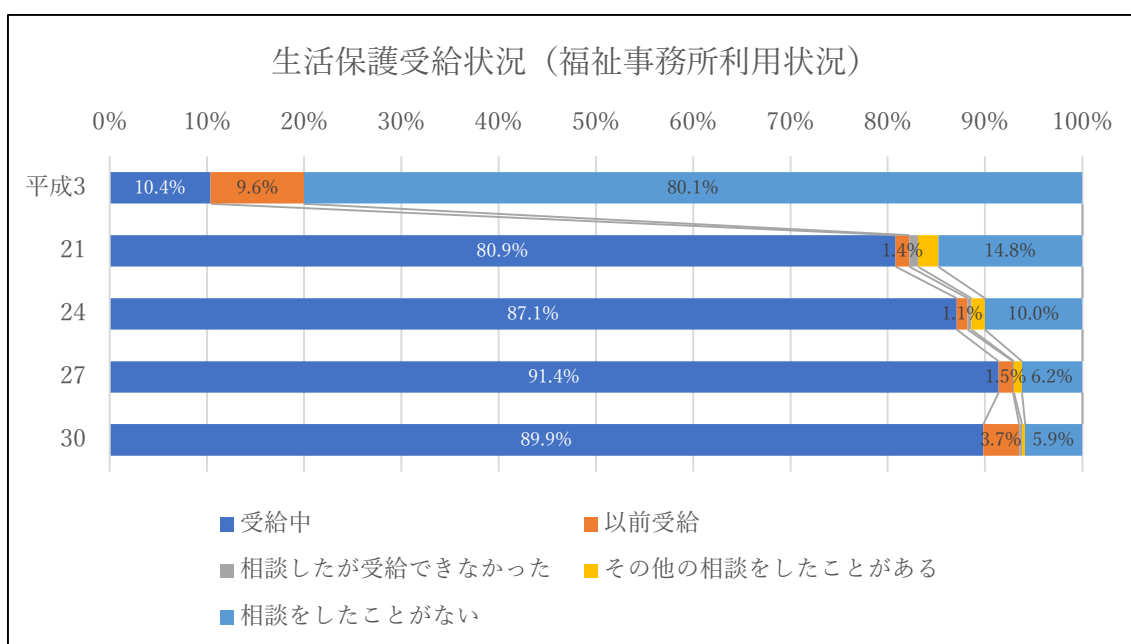


図 13 生活保護受給状況（山谷地域 宿泊者とその生活：東京都福祉保健局）

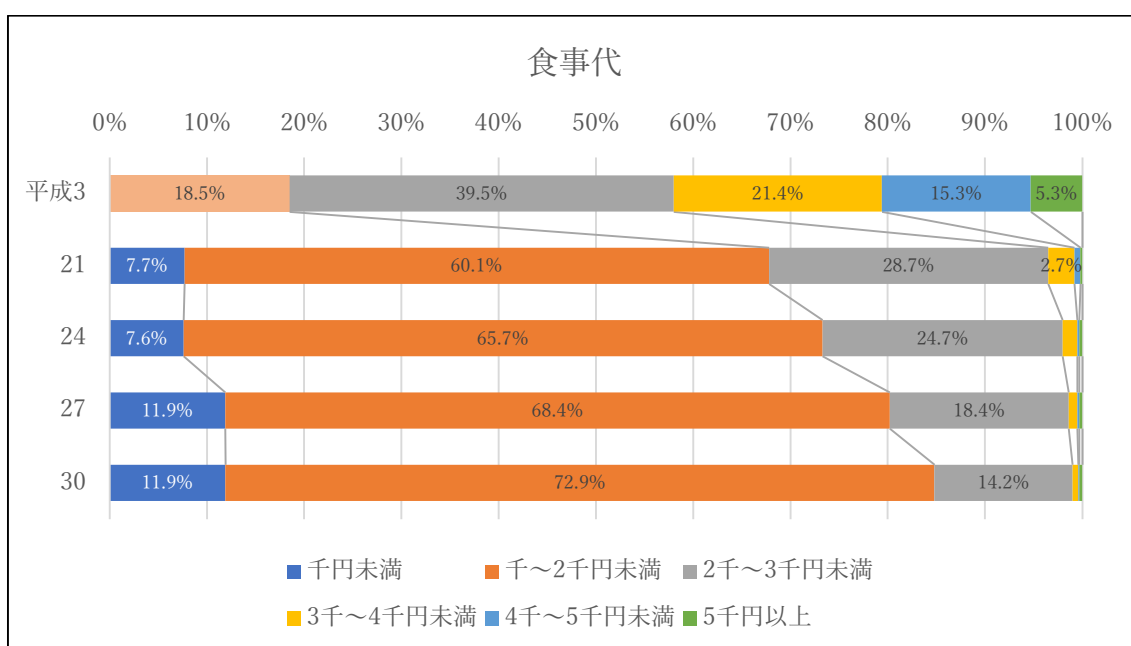


図 14 1日の食事代（山谷地域 宿泊者とその生活：東京都福祉保健局）

山谷地域は自転車の数が非常に多いところである。理由はいくつかある。まず、狭い部屋のドヤ（簡易宿泊所）が密集して建っているため、小さい建物に対してそこに住んでいる人が多いということと、酔っぱらった日雇労働者や一部の山谷の住人が、様々なところから勝手に盗み、乗ってきた自転車を放置していることからドヤの前には非常に多くの自転車が置かれるようになる。そしてもう一つの理由は、この地域の商店や住宅の前に家主が、軒先や店先で野宿されるのを防ぐために自転車を並べることも、山谷地域で自転車をよく見かける要因になっている。

2-3-4 コロナ禍において

新型コロナウイルス感染症の流行によって、山谷の寄場は大きな影響を受けている。昨年4月8日から6月8日までの2か月間、東京都の特別就労対策事業が中断したことで収入が急減した路上生活者も少なくない。特別就労対策事業というのは、通称「輪番」と呼ばれる東京都の公共事業で、公園や霊園の草むしり、ゴミ拾い、道路清掃などを輪番制で紹介し、日払いで7500円前後の収入が得られるものである。山谷では特殊車両などの資格のない高齢者への仕事の紹介はほとんどなくなっており、この事業を唯一の収入源としている人も多く、死活問題となっていた。6月8日の再開後も仕事量が戻ってきていないため、依然として深刻な問題となっている。

城北労働・福祉センターにおいても、娯楽室や敬老室の利用が一時休止される事態も発生した。娯楽室は、テレビコーナーや図書スペース、将棋コーナー、広い炊事場を備えており、路上生活者にとっては体を休めることができる場所であり、特に寒い日に利用が多く、寒気から逃れる手段を多くの路上生活者が失った。

第3章：「福祉の街」への転換期におけるサービス・活動

行政は、問題をたびたび起こす山谷の労働者たちを排除しようとする中で、逆に受け入れようと活動している団体が山谷には多く存在する。以下では、特に長く活動を続けている7団体の活動の詳細を紹介する。

3-1 NPO 法人 山谷マックデイケアセンター ワン・ステップ

NPO 法人 山谷マックデイケアセンター ワン・ステップ（以下、ワン・ステップ）は昭和58年より台東区千束にて活動している、アルコール依存症からの回復を図るリハビリテーション施設を運営する団体である。単純労働に日ごろ従事する山谷の労働者にとって、仕事は変化のない怠惰な日常となってしまうため、山谷の労働者は非日常を求めて、飲酒やギャンブルに手を出してしまう。しかし、飲酒やギャンブルというものは、稼いだお金や生活保護のお金をほとんどつぎ込んでしまうなど、労働者を貧困に追い込む大きな原因であるため、手を出さないのが理想的であるが、前述の通り、ほとんど変化のない日常の中で、飲酒やギャンブルは唯一の楽しみとなってしまうことが非常に多い。ワン・ステップでは、飲酒をやめさせて、ただ生きるように改めるのではなく、飲酒に頼らずどのように生活をしていくかといった生活観から改めていくことに重点を置いている。

主な活動内容としては、

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">(1) アルコール、薬物依存症者の社会復帰のためのグループホーム事業(2) アルコール、薬物依存症者のためのグループカウンセリング事業(3) アルコール、薬物依存症者のための生活訓練、職業訓練事業(4) 医療、健康、福祉等の地域関連諸施設との協力、交流を推進する事業(5) アルコール、薬物依存症の調査、研究及び予防教育を含めた啓蒙、啓発をはかる事業 |
|---|

の5つとなっている。

3-2 NPO 法人 山友会

NPO 法人 山友会（以下、山友会）は昭和59年より台東区清川にて活動している、ホームレス状態など生活困窮に陥っている人々に無料診療、生活相談・支援、炊き出し・アウトリーチなどの支援活動を行う団体である。ホームレス状態など生活困窮に陥る経緯は、仕事を失ったり、住まいを失ったりと様々であるが、人とのかかわりが希薄な山谷の労働者たちは、生活困窮に陥るまでに、誰にも助けを求めることができなかった、もしくは誰かが手を差し伸べてくれるようなつながりを失っていたために社会的に孤立してしまっているの

はないかと考え、労働者たちの社会からの孤立を防ぐことに重点を置いている。

主な活動内容としては、

(1) 無料診療事業

ボランティアの医療スタッフが、おもに路上生活者の方など健康保険証を持たない方々に対して、無料診療を行っている。

(2) 生活相談・支援事業

生活上の問題や健康上の問題に対する相談支援、ホームレス状態にあった方が、アパートやドヤ（簡易宿泊所）等での地域生活に移った後の地域生活サポート（見守り、関係機関との連絡調整、緊急時対応 等）を行っている。

(3) 配食事業

(4) 宿泊支援事業

山友荘は、元ホームレスの方などで、介護が必要であることや、病気や障害のため一人で暮らすことが難しくなった方のための住まいを提供している。

(5) 居場所・生きがいつくりプロジェクト

ホームレス状態にある方や地域で暮らす元ホームレスの方などが、地域の中で孤立せずに自分の存在を認められる居場所と、自身の生きがいとなるような社会的な役割を手にするを目的に、そうした方々が主体的かつ持続的に参加することができる居場所づくりや生きがいつくりをサポートしている。

(6) 無縁仏となってしまうホームレスの人々の入れるお墓を建てたい！プロジェクト

「死後もつながりを感じていただけるように」という想いのもと、活動を通してつながりを持ったホームレス状態にある方で、無縁仏となってしまう方のためのお墓を運営している。

(7) 山谷・アート・プロジェクト

山谷や路上で暮らしている方々が、自身の身の回りのこと、そして暮らしている街を写真で記録するプロジェクト。

の7つとなっている。

3-3 NPO 法人 自立支援センターふるさとの会

NPO 法人 自立支援センターふるさとの会（以下、ふるさとの会）は平成 2 年より台東区千束にて活動している、生活困窮者に対し地域のなかで安定した住居を確保し、安心した

生活を実現し、社会のなかで再び役割や人としての尊厳・居場所を回復するための支援を行う団体である。

主な活動内容としては、

- (1) 宿泊事業
- (2) 就労支援事業
- (3) 地域生活支援事業
- (4) ホームレス地域生活移行支援事業

の4つとなっている。

3-4 NPO 法人 友愛会

NPO 法人 友愛会（以下、友愛会）は平成12年より台東区清川にて活動している、経済的に困窮している人や生活の場がない人、身寄りのない人、健康を害していたり障がいのために援助を必要とする人など、生活するうえで様々な困難を抱えている人のために宿泊所を運営したり、訪問看護や訪問介護を行っている団体である。

主な活動内容としては、

- (1) 宿泊提供事業
- (2) 訪問看護・介護事業

の2つとなっている。

3-5 NPO 法人 訪問看護ステーションコスモス

NPO 法人 訪問看護ステーションコスモス（以下、コスモス）は平成12年より台東区清川にて活動している、病気や障がいを抱える人々の自己実現を支えながら、その人らしく居宅で生活できるよう全人的ケアを提供する団体である。

主な活動内容としては、

- (1) 訪問看護
- (2) 居宅介護支援
- (3) 通所介護
- (4) 健康相談
- (5) いこいの間
→路上生活者を中心とした人々が、他の利用者やスタッフとの交流、時間・空間の共有により人とのつながりを持ち、憩いになる場を提供する。
- (6) 支援付アパート

の6つとなっている。

3-6 ほしのいえ

ほしのいえは平成3年より荒川区南千住にて活動している、労働者との平らな関係、お互いの自己の回復と自立をはかること、山谷からの視点で、社会的に不利な立場に置かれた人々の生活や人権を守るための連帯を大切にすることを目的に活動している団体である。

主な活動内容としては、

- | |
|---------------------------|
| (1) 炊き出し
(2) 生活相談・福祉活動 |
|---------------------------|

の2つとなっている。

3-7 山谷夜回りの会

山谷夜回りの会（以下、夜回りの会）は平成15年より活動している、山谷地域で暮らす路上生活者（ホームレス）の人たちに、食事や生活に必要な物資を夜回りして届ける団体である。

第4章：各サービス・活動による影響と変化

4-1 アルコール依存の治療

山谷の住人にとって酒はコミュニケーションツールの一つであり、過去や自分を忘れる薬になったり、生活の中の様々な交渉にも用いられるものである。手持ちの金がなくなった時におごられたら、金があるときにおごり返さなければいけないなどといった付き合いによってアルコール依存へと陥る人が山谷では多く見られた。似たような状況でギャンブルや薬物の依存も山谷では多く見られる。この問題の解決に力を入れている団体であるワン・ステップでは、AA（アルコホーリクス・アノニマス）の12ステッププログラムの基本である1,2,3ステップを中心にした、酒を必要としない生き方の習得を目指す方法で、アルコール依存症と向き合っている。

AA12のステップ

1. 私たちはアルコールに対し無力であり、思い通りに生きていけなくなっていたことを認めた。
2. 自分を越えた大きな力が、私たちが健康な心に戻してくれると信じるようになった。
3. 私たちの意志と生き方を、自分なりに理解した神の配慮にゆだねる決心をした。
4. 恐れずに、徹底して、自分自身の棚卸しを行ない、それを表に作った。
5. 神に対し、自分に対し、そしてもう一人の人に対して、自分の過ちの本質をありのままに認めた。
6. こうした性格上の欠点全部を、神に取り除いてもらう準備がすべて整った。
7. 私たちの短所を取り除いて下さいと、謙虚に神に求めた。
8. 私たちが傷つけたすべての人の表を作り、その人たち全員に進んで埋め合わせをしようとする気持ちになった。
9. その人たちやほかの人を傷つけない限り、機会あるたびに、その人たちに直接埋め合わせをした。
10. 自分自身の棚卸しを続け、間違ったときは直ちにそれを認めた。
11. 祈りと黙想を通して、自分なりに理解した神との意識的な触れ合いを深め、神の意志を知ることと、それを実践する力だけを求めた。
12. これらのステップを経た結果、私たちは霊的に目覚め、このメッセージをアルコホーリックに伝え、そして私たちのすべてのことにこの原理を実行しようと努力した。

図 15 AA（アルコホーリクス・アノニマス）の12ステップ

アルコール依存は、アルコールハラスメント（アルハラ）や家庭内暴力（DV）、児童や高齢者への虐待や犯罪といった暴力行為を引き起こす一因にもなる、社会的にも重要な問題である。したがってアルコール依存に対する治療は、住人たちの健康を増進させるだけでなく、様々な暴力行為の発生防止など、山谷での住みやすさ・生きやすさに対し、大きな影響を与える活動となっている。

4-2 宿泊・生活支援

ほかの地域とは違い、山谷といった日雇労働者のまちでは住所を持たない人が多く見られる。それは、持ち家を持たずに簡易宿泊所で寝泊まりしている人が多いためである。しかし山谷は他の日雇労働者のまちと比較すると、まちの中にも様々な主体が混在していて、明確な境界線がないという特徴がある。例えば、大阪の釜ヶ崎ではおよそ三角形の形に 0.62

km²の範囲に簡易宿泊所が集中しており、そこを日雇労働者のまちと言えるのに対し、山谷は山谷地域と呼ばれるエリアの中の、隅田川沿いの南千住、南千住駅・小塚原刑場跡付近、旧山谷の3か所に分散しており、かつ山谷地域全体に点在している状態である。つまり、はっきりとして境界線が存在せず、一般住宅や地域の商店、工場、オフィスビル等が混在している。そのような状況から、単純に高齢化した日雇労働者への対策をするのではなく、地域の住人やそこで働く人たちを含めた合意形成からなる対策が重要となってくる。また、山谷地域は台東区と荒川区をまたぐ位置にあることが問題の解決をより複雑なものとしている。

また、活動に対する現状の課題として、大多数の住人がNPO等の運営する無料・低額宿泊所よりも自由度の高い簡易宿泊所を選ぶ傾向にあることが挙げられる。その傾向は、施設にお世話になっているのではなく一人の自立的な宿泊客であるという、山谷の住人に多く見られる一種のプライドのようなものから生まれてきているため、今後は住人たちの尊厳を大事にし、福祉の観点だけでなく、一顧客、一消費者としての対応も求められている。それらを踏まえたうえで、簡易宿泊所には拘束的な施設以上の価値や潜在力があると考えられる。

4-3 訪問看護・介護

「4-2 宿泊支援」でも述べた通り、山谷の住人には「一人の自立的な宿泊客」であるというプライドを持つ人が多く、そのため拘束的な福祉施設への入所を敬遠する傾向にある。他の地域でも施設を敬遠する人は存在し、その多くは家族による介護を受けているのであるが、山谷の住人の多くは独身であり、家族等による介護が不可能である。そこで、住み慣れた簡易宿泊所で介護や医療的ケアを受けることができるように訪問看護・介護の活動を行っている。

昨今の新型コロナウイルス感染症の流行によって訪問看護・介護は多大な影響を受けており、看護師からの感染を危惧して利用を控える利用者の増加や、反対に訪問回数を増やすことで異常の早期発見や感染症に対する不安やストレスの軽減へとつながったケースも増えている。特に利用者に体調確認や感染対策のアドバイスをすることで不安の軽減に努め、利用者が発熱し感染の可能性が発生した場合は訪問した看護師が受診可能な病院を探すなど、地域での感染症に対する体制整備に大きく貢献している。

4-4 炊き出し、食事提供

山谷地域の路上生活者数は図2の通り、今にも1,000人を下回るのではないかという状況だが、まだ多い状態が続いていて、そのため毎日の食事に困る人も多く見られており、いくつかの団体は炊き出しやアウトリーチを行うことで、食事を提供している。しかし、この活動はただ食事を提供するだけではなく、生活相談など新たな支援へとつなげていく「出会

いの場」としての意味合いも強く、社会に何も期待せず孤立を深める路上生活者たちと食事を共にすることで、路上生活者同士を、そしてボランティアとのつながりを作っていくことで路上生活者たちを引き留めるコミュニティ形成を目指している。

4-5 就労支援

就労支援は数多くある支援の中でも特に従来から盛んに行われている支援で、高度経済成長期に設立された、東京都城北福祉センターと財団法人山谷労働センターがその役割を担ってきた。就労支援は求人紹介をするだけでなく、働く上での法律やルールの指導、悪質な事件事故への対応と労働者の保護など、労働者が就労するうえで起こりうるトラブルに対しても支援を行うため、日雇労働者のまちにおいてはかなり重要な支援である。

第5章：総括

5-1 総括と図式化

山谷地域が労働者の街としての姿が衰退し失われつつあることは、高齢化や経済不況のためであると一般に言われているが、その二点だけでは、労働者の街の衰退の理由にはなりえないと私は考える。なぜなら、山谷地域は関東大震災や世界恐慌、第二次世界大戦、石油ショックなどの大きな社会的不安や不況を経験しながらも労働者の街であり続けてきたからである。バブル崩壊によって労働者の街・山谷は初めて動揺し、以降は福祉の街へと変化していったのであるがそれは、労働の現場で日雇労働者が不要になったということではない。現に労働者派遣法は改正し続けており、非正規雇用者も増え続けている。平成23年には非正規雇用者率が35%を超え、令和元年（平成31年）には38.3%にまで及んでいる（労働力調査：総務省統計局）。

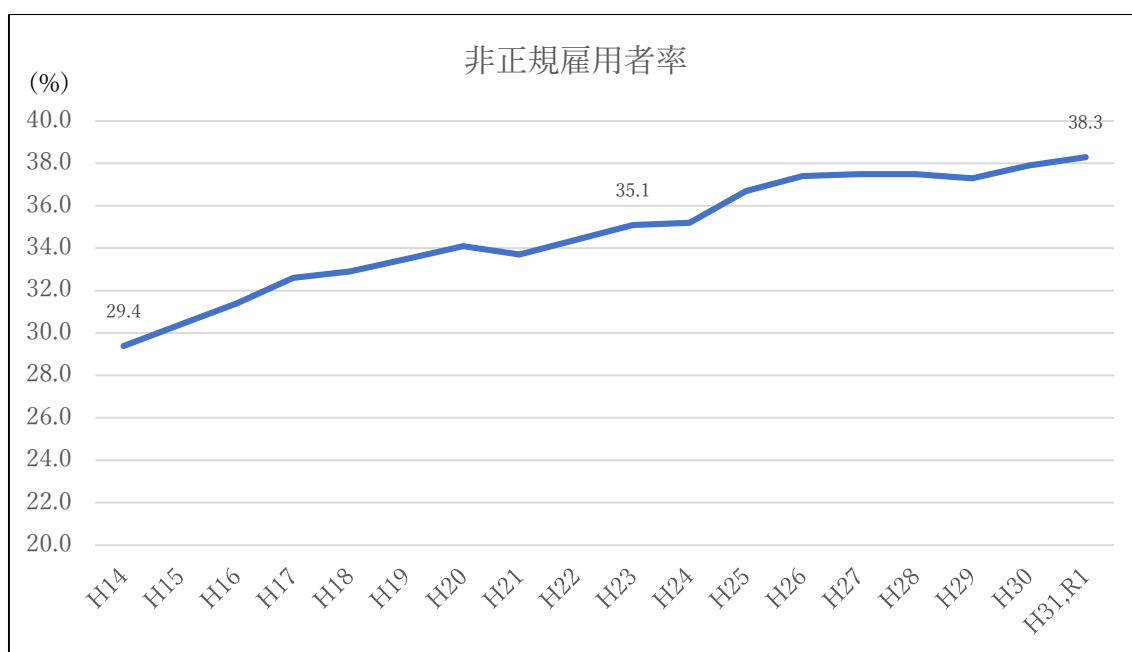


図16 非正規雇用者率（労働力調査：総務省統計局、H14～R1）

ではなぜ、労働者の街の山谷が衰退したのかについて、私は日雇労働市場としての「場所」の必要性が失われたことが最大の原因であると考えます。平成8年に携帯電話の契約数が1,000万台を超え、以降も年間1,000万契約のペースで増加していったことによる携帯電話の普及や、2000年代より始まるインターネットカフェ等の複合カフェの流行によって、市場が住所地から通信機器へと移動したのである。つまり、仕事を探す際にわざわざ寄せ場のドヤに住む必要がなくなり、インターネットカフェやマンガ喫茶といった複合カフェに寝泊まりすればよくなったために、労働者が職を求めて寄せ場に来る、従来までの労働者の

街としての姿は失われたと考える。

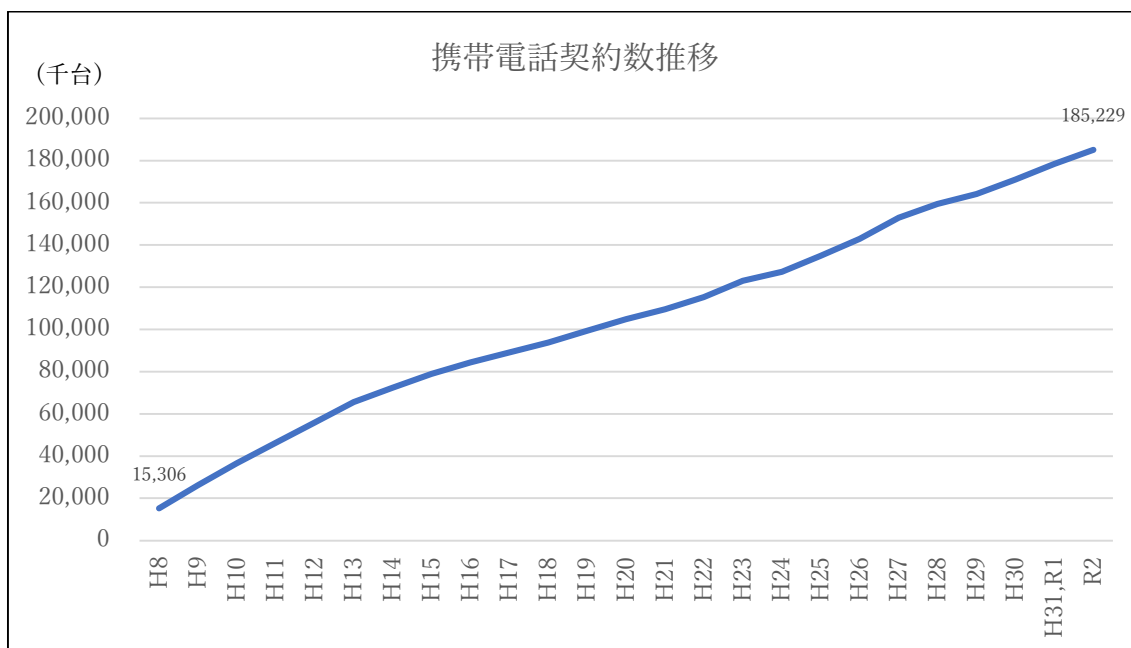
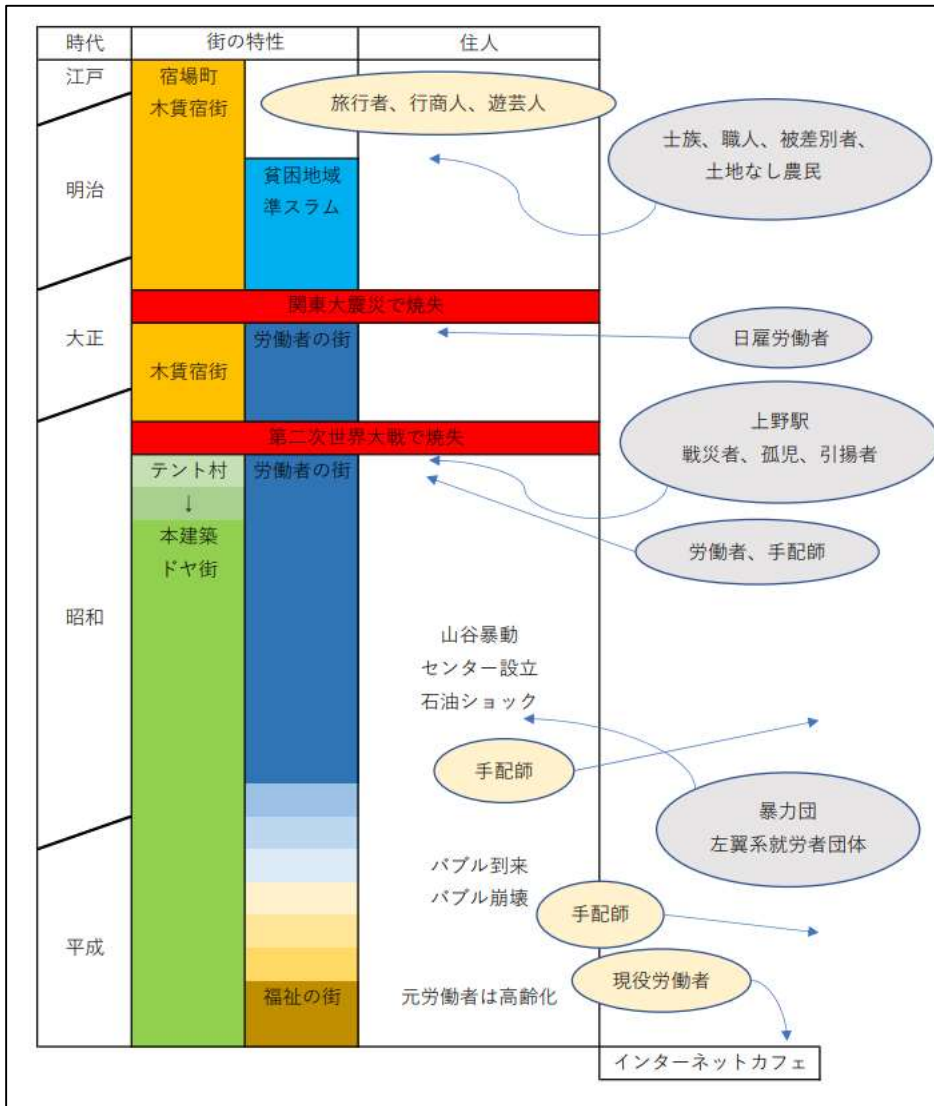


図 17 携帯電話契約数推移 (一般社団法人 電気通信事業者協会、H8～R2)

2000年代後半より新たに社会問題として表面化してきたものがある。それは、「ネットカフェ難民問題」である。ネットカフェ難民とは、いわゆるホームレスの一種で、定住する住居がなく、寝泊まりする場としてインターネットカフェを利用する人々のことを指し、平成30年の東京都の調査によると、都内に約4,000人存在し、そのうちの約76%が不安定就労者であった(住居喪失不安定就労者等の実態に関する調査報告書:東京都福祉保健局生活福祉部生活支援課)。平成20年に埼玉県蕨市において住民登録を申請した男性の住所が、市が受理したのちにネットカフェの店舗の住所であることが発覚した際に、市が条件付きでの住民登録を認めたことを当ネットカフェが逆手に取り、「日本で唯一、住民票登録ができるネットカフェ」として宣伝を始めるなど、ネットカフェを使った貧困ビジネス問題も指摘されてきているように、労働者の街特有の社会問題は、山谷からはあまり見られなくなったものの、全国各地のネットカフェ等の複合カフェへと広まっていったため、解決したのではなく、今もなお根深い問題を残しているのである。

	推計値	オールナイト 利用者中の 構成比
①住居喪失者	約4,000人	25.8%
(内訳)		住居喪失者中の 構成比
②住居喪失不安定就労者	約3,000人	75.8%
③住居喪失正社員	約200人	4.5%
④住居喪失自営業	約200人	4.9%
⑤住居喪失失業者	約300人	7.4%
⑥住居喪失無業者	約200人	5.7%

図 18 住居喪失不安定就労者等の推計値（東京都福祉保健局）



5-2 謝辞

本論文の執筆にあたり、協力して下さった多くの方々に深くお礼を申し上げます。ゼミの同期の皆さんの貴重な意見やコメントが自分の想定外だった新たな視点に気づかせて下さったりと論文の方向性を定めるうえでも非常に役に立ちました。本当にありがとうございました。そして最後に、毎回のゼミでの報告や相談の場で、ご丁寧にご指導いただきました浦野先生には、感謝の念が堪えません。昨今の社会情勢の影響を大いに受け、実地調査は自分の想定よりも少なくせざるを得ず、文献調査も図書館等の利用制限や時間制限によって中々目を通しきれずに多大な時間を費やしましたが、このような情勢での執筆経験は今後にとっても大きな糧となればと思います。

参考文献

- 『山谷の実態と福祉の概要』、東京都民生局、1961年
- 『山谷事件 鳴動つづける東京の活火山』、福祉対策研究会、1964年、茜書店
- 『山谷地域における簡易宿所宿泊世帯の住生活事情』、東京都山谷福祉センター、1964年
- 『山谷の概況と城北福祉センター』、東京都城北福祉センター、1966年
- 『山谷地区の労働事情』、東京都労働局職業安定部労働課、1969年
- 『山谷地域 宿泊者とその生活』、東京都民生局山谷対策室、1970年
- 『山谷 現況と歴史』、東京都城北福祉センター、1972年
- 『山谷地域と城北福祉センター』、東京都城北福祉センター、1972年
- 『山谷ドヤ街 1万人の東京無宿』、神崎 清、1980年、時事通信社
- 『日本の下層社会』、横山 源之助、1985年、岩波文庫
- 『現代棄民考 山谷はいかにして形成されたか』、今川 勲、1987年、田畑書店
- 『焼跡少年期』、吉岡 源治、1987年、中公文庫
- 『最暗黒の東京』、松原 岩五郎、1988年、岩波文庫
- 『図書館のあゆみ 創立 50 周年小史』、荒川区立図書館、1989年
- 『労働経済動向調査』、労働省、1990年
- 『荒川区史跡散歩』、高田 隆成・荒川史談会、1992年、学生社
- 『江戸の非人 部落史研究の課題』、本田 豊、1992年、三一書房
- 『明治東京下層生活誌』、中川 清、1994年、岩波文庫
- 『30年のあゆみ 創立 30 周年記念誌』、財団法人山谷労働センター、1996年
- 『城北福祉センター 30年のあゆみ』、東京都城北福祉センター、1996年
- 『ず・ぼん 図書館とメディアの本 4』、1997年、ポット出版
- 『東京の下層社会』、紀田 順一郎、2000年、ちくま学芸文庫
- 『昭和経済史』、中村 隆英、2007年、岩波現代文庫
- 『奥浅草 地図から消えた吉原と山谷』、佐野 陽子・江原 晴郎、2018年、サノックス
- 『山谷地域 宿泊者とその生活』、東京都福祉保健局生活福祉部保護課、2019年
-
- 『15年前の東京・山谷は今と一体何が違ったのか』、塚田 努、2020年、東洋経済 ONLINE
(<https://toyokeizai.net/articles/-/362679>)
- 『「悪意なき偏見」にまみれたドヤ街・山谷。大衆酒場から生まれた再生の狼煙』、栗本 千尋、2019年、BAMP
(<https://bamp.media/column/kurimoto01.html>)
- 『「やられたらやり返せ！」ドヤ街・山谷に棲む人々はなぜヤクザに抗争を仕掛けたのか』、牧村 康正、2020年、文春オンライン
(<https://bunshun.jp/articles/-/42134>)
- 『日雇い労働者の街「山谷」に潜入した若者が見たものとは』、塚田 努、2020年、幻冬舎 plus
(<https://www.gentosha.jp/article/15021/>)

『「山谷地区」の意外な現在…労働者の街はどう生まれ変わったのか?』、長谷川 高、2020 年、マネー現代

(<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/70119>)

『「山谷」を初めて歩いてみた』、鈴木 崇弘、2015 年、論座

(<https://webronza.asahi.com/politics/articles/2015040300003.html>)

『「都市型限界集落」となった山谷：歴史とその変遷』、吉間 慎一郎、2015 年、THE BIG ISSUE online

(<https://bigissue-online.jp/archives/1017944393.html>)

『山谷のセレブなホームレス、太陽光でエアコン完備・カギつき!』、秋山 謙一郎、2017 年、DIAMOND online

(<https://diamond.jp/articles/-/141661>)

『大都市の「限界集落」』、清成 忠男、2019 年、大正大学 地域構想研究所

(<https://chikouken.org/column/9154/>)

『2050 年の大都市圏—都心の限界集落化? ~郊外から都心へ、高齢化の大転換が予想される~』、竹本 遼太、2014 年、三井住友トラスト基礎研究所

(https://www.smtri.jp/report_column/report/2014_08_26_1871.html)

一般社団法人 電気通信事業者協会、携帯電話・PHS 契約数

(<https://www.tca.or.jp/database/>)

『住居喪失不安定就労者等の実態に関する調査報告』、厚生労働省、2007 年

(<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000004c72-att/2r98520000004ca0.pdf>)

『住居喪失不安定就労者等の実態に関する調査報告書』、東京都福祉保健局生活福祉部生活支援課、2018 年

(https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2018/01/26/documents/14_02.pdf)

『<ミジメ>と<ホコリ>のはざ間で生きる人々—山谷でのフィールドワークから—』、清水 裕子・高橋美香子、羽山由美子、水野恵理子、2002 年

(<http://arch.luke.ac.jp/dspace/bitstream/10285/668/1/KJ00004781722.pdf>)

『「山谷・寿町」日雇い者が瀕するコロナ禍の憂鬱』、本間誠也、2020 年

(<https://toyokeizai.net/articles/-/347889>)

『山谷・寿町 日雇いの街のコロナ禍』、本間誠也、2020 年

(<https://premium.toyokeizai.net/articles/-/23903>)